

現代のケアをいかに把握するか
——新自由主義下のフェミニズムを考える——
菘輪明子（名城大）

今世紀に入ってから、日本において女性の労働力化が著しく進展し、子育て中の家庭の共働きが進展した。人口構成の変化から女性労働力需要が高まったという企業サイドの事情に加え、グローバル化と新自由主義の中で生じた男性労働者の賃金抑制が家庭での女性稼得への要求を高めたことが、その背景となっている。これに加えて、単親家庭が増えたことなどにより、保育ニーズがこの20年でかつてないほど急速に高まり、保育の外部化を促進させている。

日本政府も、企業サイドの女性労働力需要の高まりを受け、保育の外部化を推し進めてきた。しかし、外部化の方法は、周知の通り、戦後に行われたような公共的な保育を拡大するのではなく、市場主義的な保育の拡大によって行われている。こうした中で、外部化された保育の量的な少なさ、保育労働者の労働条件の劣悪さ、保育の質の悪さが露呈し、全社会的な問題となっている。

加えて、ケアの外部化が、女性の中での格差・分断を深化させているとの指摘もある。ホームワーカーとして低賃金のケア労働者が家庭内のケアを担ったり（そのほとんどが女性である）、私企業が営む保育施設で保育を低賃金で担ったりする（そのほとんどが女性である）などの実態が告発されているが、こうした現実には上層に位置する女性が下層女性を搾取して、社会での地位を向上させている女性内部の階層的分化の象徴ではないかとの指摘もある。

これまでのフェミニズムは、女性とケアに関わる問題を、ジェンダー構造に基づく、家庭・女性へのケアの押しつけとして理解してきた。特に、マルクス主義批判から出発したマルクス主義フェミニズムは、こうした家庭と女性に対するケアの押しつけを資本・賃労働の外側にある収奪として把握し、家庭内のケアが資本主義の蓄積構造と結びついていることを明らかにしてきた。資本に必要な労働力の再生産にとってケアは不可欠な要素であるにもかかわらず、利潤追求のために、家庭内でタダで、女性に押しつけられてきたのであり、現在、生じている保育の問題もこうしたジェンダー構造帰結であると。また、こうした理論的背景もあって、ジェンダー視点からのケア領域の分析は、家庭・女性へのケアの強制と外部化による代替という視点にとどまり、外部化されたケアのあり方の分析は十分に行われない傾向にあり、フェミニズム視点から行われる外部化されたケアへの関心・分析の対象も偏りがちであるように思われる。

しかし、今日の外部化が進んだ保育領域を素材に、資本主義とケアの構造を把握しようとする時には、こうした枠組みだけでは、不十分である。ケアの領域それ自体が市場・准市場として開かれた領域となり、資本の利潤追求の場とされていることや、ケアが商品を擬したものと扱われていること、そして、そうした状況が、女性全体あるいは社会的資源に乏しい階層の人々に負の影響を与えていることなどは、家庭内におけるケア労働の搾取という枠組みだけでは十分に把握できない。現代の保育をめぐる現状を踏まえるならば、家庭と女性に対するケアの押しつけによる資本蓄積という視点だ

《第1分科会》

反新自由主義のフェミニズム——その現代的条件をさぐる

けでなく、ケア領域の市場化／資本-賃労働関係を含む資本蓄積の構造と、そこで生み出される性差別や抑圧、ケアの変質という視点からの分析があつてはじめて、女性がたたかう相手の姿が浮き彫りとなるだろう。

とはいえ、マルクス主義批判から出発し資本-賃労働の外側にある収奪としてケアを把握したフェミニズムにも、新自由主義の中での女性の諸問題を捉えようとする理論的試みも存在している。

そこで本報告では、保育領域を素材として、ケアの外部化・市場化の政策動向と現状、そこで生じている（特に女性という視点からの）問題を明らかにした上で、日本の理論状況に即して、こうした新たな試みを紹介した上で、さらに必要な視点は何かも検討したい。

報告の骨子は、下記の通りである。

1. 新自由主義下の女性労働と保育の外部化

その現状と政策動向／准市場化された保育供給体制

2. 生じている諸問題

劣悪化した保育労働／保育の質の転換／「困難」を抱える子どもの保育の困難

3. 資本主義とケアを把握するための理論の新たな試み

マルクス主義フェミニズムの理論とその刷新の試み

ケアする人の政治的エンパワメントの重要性
元橋利恵（大阪大学）

近年、思想や哲学のみならず、福祉や社会学、教育など多くの分野で注目されているのがケアの議論である。ケアの定義はその議論によって様々であるが、一般的な定義は子育て、介護、看護、介助といった「依存者」（ケアの倫理学者であるエヴァ・キテイの表現）の必要を満たす活動や思考を指す。歴史的にまた現代においてもケアは女性のおこなうこととされ殆どの場合女性によって営まれてきた。1980年代、キャロル・ギリガンによって「ケアの倫理」が提唱されて以来、それまでの知の枠組みでは省みられてこなかったケアの営みや思考を再評価する議論が起こっている。ケアの議論が注目されてきた背景には、新自由主義経済と社会への影響への対抗として、他者との関係性を重視し、他者の傷つきやすさへの思いやりや責任を示すケアの倫理が経済至上主義への対抗のロジックとして見出されてきたことが伺える。そのようななか、ケアの営みを社会の基盤となるものとして位置付けるフェミニズム理論の潮流であるケア・フェミニズムも発展してきた。

しかし、ケアの営みに価値を見出すフェミニズムの議論は多くの批判を呼ぶ問題含みのテーマであって来た。それらの批判のポイントは、ケアの倫理が、女性が自発的にケア役割を行っているとする事で、ケアと女性を本質主義的に結びつけ、性別分業を肯定してしまっている効果をもつということである。しかし、近年ではケア・フェミニズムはケアと政治を再接続させ、ケアの営みに既存の社会構造を変革していく潜在的な力を見出しているという再評価の議論もみられる。ケアをめぐる議論は、ケアを「女性のもの」として「発見」というフェーズから、ケアを基盤とした政治をいかに構築していくかというフェーズに移行してきているとも捉えられる。

さらに、近代社会における公私二元論の枠組みのなかでは、ケアは女性が担うものであるゆえに社会的なプライオリティが低く、また女性はケアする存在であるがゆえに理性に劣る存在とみなされてきた。フェミニズムにおいて男性中心主義的な社会構造や知の体系のもとでは、女性は自らの経験を自分で意味づける力を構造的に奪われていることが示されてきたように、ケアする人はケアする存在であるがゆえに、政治的主体であること自体や政治参加を制限される構造があることが指摘できる。

ジェンダー、フェミニズムの立場にたつ研究では、新自由主義における女性の影響として、主には、①規制緩和による労働条件の悪化と「貧困の女性化」が指摘されてきた。「女性活躍」政策にみられるような、女性の経済的活用がその実女性のダブルワークの負担や貧困を招いている。また、②その背景にある家族主義や保守的価値観についても併せて指摘されてきた。加えて日本においては、男女共同参画政策に象徴されるように、性差別が明確に禁止や是正対象となることなく曖昧な「男女平等」が掲げられてきた経緯からもわかるように、フェミニズムが承認されたとは言えないままに女性差別は解消されたとみなされる状況が形成されている。新自由主義的な社会変化は、ジェンダーに起因する不平等や支配構造を巧妙にかくしてしまうことで、人々の困難を「自己責任」とし、政治的連帯を阻害する。

以上からも、新自由主義的な社会の変化はケアの個人責任化を促進しているといえ

《第1分科会》

反新自由主義のフェミニズム——その現代的条件をさぐる

る。これらに対抗するためにも、ケアする人の政治的エンパワメントが求められている。エンパワメントというとき、例えば母親に対する仕事と育児の両立といった社会的タスクの「成功」を助けるといったものよりも、ケアを自己責任化する風潮や構造的な暴力に対抗し、ケアを社会的に拓いていくための「闘争」を助けるものがより必要である。ケアを基盤とした政治を、ケアする人の運動としてどのように展開していけるか、また、デモなどの示威行為をとまなう「わかりやすい」社会運動でなくても、ケアする人が自身を社会的文脈に位置づけたり集団的なアイデンティティを獲得するための社会的条件とは何かを探っていくことが課題となるであろう。

本報告では、こうした点について母子手帳や母親の社会運動の言説分析を通して検討する。ケアをますます女性の自己責任とする母親や女性への「支援」政策のロジックや、母親たちの現代の社会運動や政治参加における困難に焦点をあて課題を探る。